

ひろがるネット

出雲教育事務所管内
広域特別支援連携協議会事務局

島根県教育庁出雲教育事務所内
〒693-8511 出雲市大津町1139
電話0853-30-5682 FAX36-5686

平成19年7月発行

平成19年度 第1回広域特別支援連携協議会が開かれました

テーマ：「保・幼、小、中、高のつなぎと関係機関連携の具体化」平成19年7月12日(木) 出雲合同庁舎701会議室

新委員11名を含む24名で今年度第1回広域特別支援連携協議会が開催されました。平成17年度から通算5回目の開催で、学識経験者、医療、福祉、教育、行政等の関係機関の方で出雲教育事務所管内の特別支援教育の体制整備をどう進めるか話し合いました。

◆会長は江角仁委員、瀬島齊委員に決定◆

事務局の昨年度報告、協議会の説明の後、会長、副会長の互選を行いました。昨年度に引き続き、会長に出雲養護学校長江角委員、副会長に島根大学医学部瀬島委員を推薦する発言を受け、全員の拍手で決定しました。

◆高等学校の委員参加で中から高へのつなぎも◆

今年度から高等学校の委員にも入っていただき、保・幼、小、中に高等学校を加えた一貫した支援体制という新たな視点でも話し合われました。

また、出雲市立第三中学校の守田あかね教諭に「小学校から高等学校へつなぐ中学校の役割」という題で提案発表していただきました。先進的な取組であるとともに地道に実践を積み重ねられ、相互連携をめぐる話し合いを進める上で大いに参考になりました。

協議は会長の進行で進められ、はじめに保・幼から小

学校へ、次に小学校から中学校へ、最後に中学校高等学校へどう支援を具体的につないでいくかについて、それぞれ関係者が地域で進めている実践を紹介し、課題について話し合いました。昨年度は各市町の取組に差があるという話題も出ましたが、今年度は市町の実態に応じて連携協議会や相談支援チームが設置され本格稼働する体制が整ったようです。また、各機関がつながり合おうという意識が各地の情報提供から感じられ、連携体制も形から内容の充実へと進みつつあることを実感しました。

◆優れた実践の種が各地に広がることを期待◆

最後に瀬島副会長があいさつで、「大学として、今後は発達障害の分野で若い医師を育てていくことが一つの使命でもある。高等学校を含め、体制がなかなか整わない中でも困っている子がいればできる支援をすぐ始めていきたい。三中のような実践を広く紹介し、一緒に進めてきた先生方が種をまき、広がっていくことを期待したい。」とまとめられました。



動き始めた各市町の取組の中から

飯南町では、昨年度の3月に町の連携協議会が開催されました。7月か8月に巡回相談員会議を開催する予定です。この会議で町内の特別支援に係る巡回相談の具体的な方法等について協議される予定です。

奥出雲町では、8月27日(月)に第1回連携協議会を開催する予定。町内での特別支援体制をどう進めるか、巡回相談の方法や引継ぎの方法などが話し合われます。

斐川町では、特別支援連携協議会が6月22日に開催され関係機関が町内の連携体制について話し合いました。また、協議会やコーディネーター研修会で「個別的教育支援計画」を含めた検討会を行う予定です。

出雲市では、通常学級担任を対象とした発達障害児理解のための下記研修会が夏季休業中に開催される予定です。
・県立大学短期大学部 山下一也教授 「発達障害についての概要」
・西田小学校 野田和江教諭 「具体的な対応の事例」

雲南市では、学校を対象とした研修会「通常学級における対応について」が8月21日に、幼稚園、保育所職員対象の研修会「気になる子どもの現場での対応」が8月1日に開催される予定です。
また、教育委員会と健康福祉部が支援体制整備に向け連携協議を始める予定です。



～提案発表 出雲市立第三中学校の実践から～

小学校から高等学校へつなぐ中学校の役割

協議に入る前に出雲市立第三中学校の守田あかね教諭から中学校で進められる実践を紹介してもらいました。内容の要旨は以下のとおりです。

●入学前からどうサポート体制を組むか。卒業時の進路決定に向けてどう支援するか●

出雲市立第三中学校の教育相談主任、特別支援教育コーディネーター、通級指導教室を担当している。出雲市は今年度13校ある中学校のうち8校に私と市指導員で巡回指導を行っている。通級、教育相談、特別支援教育コーディネーターの役割についてもお話したい。

今日のテーマに関して、中学校の課題は大きく2点あるととらえている。1点目は小学校から入ってくる子どもにどうサポート体制を組んでいくか。もう1点は、卒業時の進路決定に向けてどう支援していくか。小6でリーダーとして活躍してきた子ども達が中学校では一番下の学年。また、中学校では教科担任制に変わる。いろいろな不安を感じながら中学校生活がスタートしていくこの時期に「自己肯定感」を持たせられるかが大切だろう。

●待っていてはだめ、中から小へ出向いて得る情報。教育相談の充実と情報の共有化を●

1点目の受け入れでは、まず、入学前の教育相談を充実させること。入学前から積極的に相談を受け、場合によっては、市教委就学指導委員会とも連絡をとり就学相談を行う。具体的には教育相談主任の私と生徒指導専任教員、生徒指導主事、養護教諭の4名が巡回して相談にあたっている。以前は中3担任が小中の連絡会をしていたが、3年前から実際に小学校の授業で子どもの姿を見て情報を集めるようにしている。集めた情報は新1年部へ伝え、クラス編成や学級担任を決定するのにも役立っている。

●時間割に組んで校内支援委員会を毎週開催。夏季休業中には全教職員で事例検討会●

入学後の校内体制として校内支援委員会がある。そこに生徒指導専任教員、相談主任、養護教諭、各学年部からの支援委員、スクールヘルパー等に参加してもらう。毎週月曜4校時に時間割に組んでもらい定期開催し、支援内容について方針を立て、不登校、不登校傾向、発達障害のある生徒など本校では10項目に整理し、50名を超える生徒について毎週話し合いを重ねている。また、生徒理解を深める生徒支援会議、さらに、教育相談活動のハートフルウィークやハートフルディの取組を充実させている。スクールカウンセラーや関係諸機関との連携、チームでの支援を心がけている。特にアピールしたいのは、夏季休業中の事例検討会を3年行っていること。全教職員がお客さんにならぬようその子の支援にあ

たるという気持ちで支援の具体化についてのグループワークを行っている。

学習や生活支援の取組について、本校にはクラスサポート事業ということで3名のクラスサポートの先生に入ってもらい効果を上げている。ただ、この事業は1年生に限られるので、2年時に校内で支援をどう継続するかが課題。2点目は学習面での支援が課題で学校に来にくくなるきっかけにもなっている。その意味でも教員が積極的に授業交流を行い、わかる授業づくりの情報交換を心がけている。3点目に出雲市からスクールヘルパー制度で地域の方に入ってもらっている。4点目が通級指導教室の取組。一人一人のニーズが多様で全員のニーズに応えるのには限界がある。個別の支援だけでなく、通常の授業の中でできる支援等も明確にしたい。他の学校からの相談に応じることもあり、通級指導教室該当生徒が在籍の学校でよりよい支援を受けられるよう環境整備やサポートに積極的に関わっている。特別支援学級についても孤立しないように複数の教員が関わるようにしている。



●発達障害のある生徒には進路の選択肢があまりにも少ない。求められる体制整備●

もう1つの大きな課題が発達障害のある生徒の進路をどう支援していくか。ある程度、各教科で得点がとれる生徒の場合はいいが、発達障害のある生徒の場合、選択肢が限られてしまう場合が多い。高等学校での支援体制が今後充実していくことに期待しているし、情報がほしい。コーディネーターの指名は100%だが、その動き次第で支援が充実するかしないか決まってくる面もある。また、入学者選抜試験について、時間延長という措置は場合によってしていただけるが、学校で支援をしているLDのある生徒がいたとしても、当日問題文を読んでももらえるような措置はできないのが現実。今後、何とか配慮がしてもらえないかと考えている。島根県全体で実効力のある支援体制ができると思う。



保育所・幼稚園から小学校へつなぐ



◆4歳のうちから早めに小学校につなぐ◆ ＜幼稚園＞

本園では就学を控えた5歳では遅いということで1つ前の4歳児から子どもの気になることを話題にしている。最近は連絡するとすぐ校長先生が尋ねてくださる。兄弟の情報を伝えたり、場合によっては専門機関への相談につなげたりしている。また、出雲市では幼稚園のサポーター制度が充実し、どの子にサポートするか園内で話し合うようになった。市教委から事前、事後に状況を見に来てくださり感謝している。市教委や専門の方の協力を受け、サポーター制度を通して我々も子どもを見る目が変わってきた。

◆関係機関のネットワークで早期の支援に◆ ＜保育所＞

斐川町では中部小学校に通級指導教室があり、毎年気になる子については相談に応じてもらい、就学前からの支援につないでいる。保健師との連絡もとれている。また、「いちごの会」が行う「おもちゃの家」事業で火曜日に保護者の相談を受けている。就学相談会や、町の特別支援学級や出雲部の特別支援学校の見学会をしており、保護者からも好評。3歳くらいでは診断がつくつかないにかかわらず、保護者へのフォローをしっかりとしないといけない。斐川町ではどの保育所もすぐ連携がとれるようになっている。



◆顔を見て話し合い、パイプを太く◆ ＜小学校＞

飯南町は学校数も少なくこれまで小中一貫教育で顔の見える関係ができていた。小さな町だが、昨年、中学校に特別な支援が必要な生徒が多くいた。所長校長級の保小中高連絡会（所長、校長が参加）で同じ子を見て話し合うことが大事。特に心配がないと思って送り出した子に支援が必要となり、この子たちにどんな力をつけていくか話題になった。飯南町では顔を見ながら保から小、小から中、中から高のパイプを太くすることが大事。また、特別支援学級の交流は小中合同で行い、学期に1回交流会を持ち、うまくつないでもらっている。

小学校から中学校へつなぐ



◆今ある幼保小中の組織を生かした連携を◆ ＜中学校＞

校内体制づくりを進めているがまだこれからというところ。地域全体で推進体制を進めていく必要性を感じた。木次では中学校と小学校、保育所、幼稚園の「木次の子どもを育てる会」がある。その会で特別支援連携協議会を話題にした。今は校長会レベルだが今後実務者レベルに降ろして検討していければと思う。この組織を生かし進めたい。三中の提案のように本校でも中学入学時の適応、高等学校への進路に課題を感じている。雲南圏域では中学校の通級指導教室がなく斐川西中から週1回巡回指導をしてもらっている。今後必要な生徒が増える見込みなので対策が必要である。

◆「さくら教室」の早期支援と保健師の役割◆ ＜小学校＞

奥出雲町でもいろいろなケースの情報を保健師が持っているので、小さい頃からの情報を他の機関や学校へつなぐカギになっている。

同じ奥出雲町では「さくら教室」に通っている方がいる。私は特別支援学級担任をしているが、かなり顔見知りになっていて乳幼児期からお互いに情報交換をしておられる。就学までだが、言語指導も月1回行っておられる。



◆ミュージックケアで早期に母親を支援◆ ＜発達障害者支援センター＞

発達障害者支援センターは、出雲市で言葉がなかなか出ない1歳半から幼稚園、保育園に入られるまでの子どものミュージックケアに関わっている。その中で子どもさんの成長を見守るようにしている。そこでは言葉が遅く発達検査が必要なケースがあり、明らかに発達障害が疑われるケースもある。早期の母親の不安に寄り添う良い場所になっている。場合によっては保健師に情報を流し、支援につないでいる。

◆「個別の支援計画の作成」研修を企画◆ ＜中学校＞

学校の中の指導に生かす「個別の指導計画」と長いスパンでつなぐ「個別の教育支援計画」というのは基本的に両方必要と考える。関連して、特別支援教育部が今年度「個別の支援計画の作成」についての研修を企画しており、積極的に取り組もうとしている。今後、先進的な取組について事務所を通じて情報を得たい。

◆通常の学級で支援が必要な子に「個別の指導計画」は必要だが◆ ＜小学校＞

小中学校では、これまで特別支援学級を中心に「個別の指導計画」を作成してきたが、最近は通常の学級でやっと「個別の指導計画」を作り始めたところで大きな前進である。長いスパンでの「個別の教育支援計画」については、次につなげる必要性が高いかどうかで様式も「個別の指導計画」だけでいいのではという考え方もあり、今後どう整理するかが課題である。



◆早期の気づきを適切な支援につなげ、それを継続する体制が必要◆

＜島根大学医学部＞

早期の気づきは大切。3歳、4歳は脳の成熟の面からも診断名が出せるかどうかは議論が分かれるところ。問題はそこで不適切な対応がなされ、いろいろな影響を受け、自己肯定感が育ちにくいという状況が生じてしまうこと。そういった中で、発達クリニックやウィッシュなど早期に気づいて支援体制が組めるようになってきたことは大きい。早期の気づきは大事だが、おとなしくて目立たず、就学してから問題が見えてくる場合もある。その場その場で必要な支援を始めていくことが大事。ただ、学校の担任は2年くらいで変わるのでその子の成長をずっと見ていくことができないが、医療だと長いスパンで見ることが多い。学校の担任の先生が変わるタイミングで良くなったり、逆に悪くなったりという現実もあるので、できるだけ学校側とも連絡を取り合うようにしたいと考えている。

中学校から高等学校へつなぐ



◆発達障害のある生徒の情報が入らないサポート体制はこれからという中で◆ ＜高等学校＞

発達障害が高等学校で話題になってきたのは、3年前頃からで教員も十分認識していないのが正直なところ。発達障害のある生徒の情報は中学校からほとんど入ってこない。中高の情報交換の場は生徒指導連絡会と中高連絡会。いずれも形式的で発達障害に係る情報が上がることはほとんどなかった。入学後、学習に集中できない、出歩くとといった状況が見られ、中学校へ問い合わせ、「実は発達障害の傾向があるが保護者が了解しておられなくて…」ということがあった。中高相互の情報の提供が円滑にっていないのが実情。また、入学者選抜学力検査で視力障害のある生徒に特別措置を…ということがあったが、その過程で問題になったのは、「高等学校入学後、全ての教材を拡大する等の配慮ができるか」ということだった。特別な支援が高等学校でできなければ特別支援学校の方が良いのではないかという判断もある。受検時だけの問題にとらえず、高等学校でどう支援できるかが課題。市町各小中学校の場合、その子へのサポートについて予算的に厳しいながらもさまざまな人的措置に取り組んで来られた。しかし、高等学校の場合、現実には人的なサポート体制は皆無であるという問題も大きい。

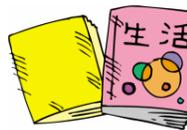
◆中学校から特別支援学校に入る生徒が急増。6年間を見越した進路保障を◆ ＜特別支援学校＞

特別支援学校では就学相談会を10月頃に行い、保護者や本人に納得してもらい、出雲養護学校で頑張るんだという気持ちになってもらうことが大事。そのため早く情報を入れる必要がある。また、今年度は高等部に入學した1年が49名と多く施設設備が追いつかない現状。また、生活の場としての寄宿舎が満杯状態で入れないのも課題。受検資格は、知的障害を主障害とするということだが発達障害で知的に遅れない児童生徒をどう受け入れるかが県全体の課題。現在は県教委が受検資格があるかどうか判断している。もう一つの課題は中学校の特別支援学級や通常の学級から入る生徒が多くなり、どう進路を保障するか。中学校在籍の3年間のうちに連携をとり、6年間で自立を目指す取組をしていくことが課題である。

保護者の思い

◆サポートブック活用で社会とのつながり◆ ＜保護者＞

養護学校高等部の保護者で子どもは全面的に介助が必要。今日は「サポートブック」を持ってきた。「サポートブック」については、担任と保護者とが一緒に作るということで子どもの顔写真や性格、コミュニケーションのとり方など記入している。出雲市の「あったかスクラム事業」のウォークラリーの時など利用した。うちの子の場合、連携がない限り生きていけないのが実情。学期毎に面談の時、「個別の指導計画」をみながら話し合っており必要性を感じている。



◆支援の必要な子をつないでもらえる時代に◆ ＜保護者＞

うちの子は高校3年生。以前は縦の連携が十分でなかったから、小学校の通級にお願いして中、高の担任や学年の先生に我が子のことを話していただいた。今日の提案にあったように中学校から積極的に相談に出向いていただけるとはありがたいこと。うちの子もLDということで3年間とても大変な思いをしたが、通級の先生につないでもらってとても良かったと思う。私のところも、もう少し早くこのような学校体制があれば良かったと思う。

